

## ヴァイオリニストTAIRIKの戯言

〔第76回〕

## 弦が揺れると、僕は季節の風になる

✦ 文 佐田大陸 text by Tairik Sada ✦

## 意外な共通点

ここ数年エンニオ・モリコーネの作品をとっても好きでよく演奏しています。モリコーネは『荒野の用心棒』『夕陽のガンマン』などの、マカロニ・ウェスタン映画のテーマで有名になったイタリアの映画音楽の作曲家です。『ニュー・シネマ・パラダイス』のテーマで世界的に知名度を得たため、メロディックで綺麗な曲を書くイメージを持つ人が多いと思います。

モリコーネは同じくイタリアの、現代音楽の作曲家のゴツフレド・ペトラッシに師事し、シェーンベルグの十二音技法など、作曲の基礎を着実に身につけました。そのため、そのままの可能性もありながら、テレビやラジオの音楽を担当し始め、後に映画音楽の作曲に専念していきました。純粋にクラシックだけをやっている人からすると、テレビやラジオ、映画音楽などの世界に行くことは「軽いもの」に手を出したヤツ」のような認識になることがあります。モリコーネのドキュメンタリーを見ると、本人もその葛藤があったようです。

自分もクラシックを学んできて、クラシックからクロスオーバーへ。TSUKEMENという様々なジャンルを演奏するグループに仕事をシフトし

ました。すると、受け入れてくれる仲間もたくさんいましたが、モリコーネが受けたような「そっちの世界へ行っちゃったのね」的な扱いは少なからず受けました。以前より熱心に応援してくれていた人から、人づてに冷ややかな言葉を浴びせかけられたり、クラシックから離れたことをやることによって、一切返信がなくなったりした人もいました。

モリコーネは、映画のシーンに合った音楽の使い方がそれはそれは見事で、悲しいシーンにはあえて悲しい音は当てない。曲調を変えて音楽の雰囲気を変えて、映画に奥行きを与えました。撮影現場で監督が他の人の音楽を流していると、気分を損ねて帰ってしまったりと、かなり気難しい面はあったようですが、名監督達は次々とモリコーネの音楽に心酔していき、イタリア映画を語る上で切り離せない存在になりました。自分の音楽を深掘りし続けたモリコーネは、数々の一流アーティストに「彼にしか到達しえない音楽の深淵に到達した」と言わしめ、音楽に上も下もないことを教えてくれました。

どの場所からでも深く掘って行った先に辿り着く境地は素晴らしく、それを見つけられるかどうかが大切で、どんな偉大な人も、死の間際まで葛藤が

あり、色んなことを悩み続ける。自分の旅はまだまだ始まったばかりだな、と思った今日この頃です。  
本年もどうぞ宜しくお願いします。

## profile

TAIRIK(たいりく) ヴァイオリニスト / ヴィオリスト / 作曲家

桐朋学園大学音楽部卒業、同大学院修了

ヴァイオリン &amp; ピアノによる3人組インスト・ユニット「TSUKEMEN」を結成後、キングレコードよりメジャーデビュー。最新アルバム「HAPPY キッチン」など、リリースしたCDはクラシック・チャート1位を次々と獲得。国内にとどまらず、アメリカ、アジア、ヨーロッパなどで700本を超える舞台に立ち、50万人以上の観客を魅了。近年ではTSUKEMENに加え、古澤巖氏と結成した弦楽四重奏団「品川カルテット」、水谷晃氏と結成した「MIZUTANI × TAIRIK」も大反響を呼んでいる。

「徹子の部屋」「題名のない音楽会」「きょうの料理 栗原はるみのキッチン日和」など数多くのTV番組に出演。

SBCラジオ「TSUKEMEN TAIRIKの信 TAIRIK発見」毎週月曜 15:00 台にレギュラー出演中。

<https://tsukemen-music.com>